【書評】「焔の焔の坩堝による造形の変容――器に接して脱皮を遂げる彫刻の姿　廣田治子著『中空の彫刻――ポール・ゴーギャンの立体作品に関する研究』三元社」『図書新聞』3447号　2020年5月9日　8面

焔の坩堝による造形の変容

器に接して脱皮を遂げる彫刻の姿

稲賀繁美

廣田治子 著
▶中空の彫刻
ポール・ゴーギャンの立体作品に関する研究
3・31刊　A５判476頁　本体7000円
三元社

ポール・ゴーギャンといえば、ヨーロッパを捨ててタヒチに移住し、「南洋の楽園」を描いた世紀末の藝術家、「高貴なる野蛮人」として知られる。本書の著者、廣田治子氏はこの「異端の画家」の日本での受容を含め、ゴーギャン研究史に該博な知識を有する第一人者。本書は著者がパリ大学に提出した博士論文（1998年）の日本語版。それも画家ではなく、もっぱら陶藝を彫刻に統合した造形的実験者・ゴーギャンに焦点を絞り、その立体作品の総目録編纂による抜本的な再評価を目指した国際的成果を世に問う、渾身の学術著作である。

一九八〇年代、英語圏を中心として「男性英雄」たるPaul Gauguinにはフェミニズム陣営から激しい攻撃が加えられた。曰くフランス植民地主義の手先、男性支配の権化、少女買春の常習者、無断借用の窃盗犯にして架空の幻影としての「無垢なタヒチ」捏造者……。フランスで学位を取得した本書には、こうした糾弾への表立った反論は見られない。だが、禁欲的かつ実証的な史実復元作業からは、高飛車な紋切り型のレッテル貼りが、いかにお門違いな先入観の押し付けにすぎなかったかも、おのずと底割れし、踏襲していた。

「失なわれゆく南国の楽園」で、西欧社会道徳の「良識」に真っ向から刃向かう「乱交」や「強姦」をも辞さなかった「扇動者」ゴーギャン。その藝術的な実験もまた、当時の常識からは、当然のごとく逸脱する。著者はその焦点を陶藝に見出し、頂点をなす造形として《オヴィリ》（1894）に指を屈する。高さ75cmの焔器の造作でゴーギャンが自分の墓に添えてほしいと遺言した作品。「野蛮人」を意味するが、バルザック仕込みの両性具有にもタヒチ習俗の裏打ちがある。狼あるいは犬を足下に従え、脇にその子を抱いて育んでいる――それが正面から見た図像学的記述。

だが背面へと廻ってみると、そこには巨大な裂け目が劈いており、内部にはぽっかりと空虚な闇が覗く。そこで初めて、この立体が元来は巨大な花瓶であった出自が知れる。あらためて側面から観察すると、像の豊かな頭髪が花瓶の外壁と融解しており、それが正面の神像を構造的に支えていることも判明する。Art nouveauの「みだれ髪」とも形容したくなる不定形の頭髪は焔でもあり、焼成の窯、「竈の火」の直喩に他なるまい。さらに造形全体は、粘土を集積させた原型から雌型をとって鋳込む「彫塑」moulage の原理ではなく、粘土に指や篦で筆触豊かに彫刻を直に施す陶彫céramique sculpture を成し、晩年のゴーギャンは画商ヴォラールに対して、自らその創始者を自負していた。

もとより花瓶のように中空を宿す器は、有用性の符牒を帯び、そのため自律性のない応用美術・副次的な装飾藝術の範疇に貶められてきた。だがゴーギャンにあっては、頭蓋骨でもある人面の内奥に潜む空虚が、むしろ造化の源泉を直視させる。ひたすら彫像の表面にばかり拘泥し、内部の空虚に無意味しか見ようとしなかった西洋彫刻の前提が、ここでは根底から覆される。だがこの革命は、有と無、陰陽の循環と相互依存へと先鞭を付け、さらには仏教的な輪廻転生・永劫回帰の表裏のうえに、野蛮と文明とを止揚して、再生への途を探る。

ここからは評者の解釈が混入する。巨大な裂け目は否応なく女性性器を想起させるが、それは生命誕生の原器たる両性具有の神像には不可欠の属性だったはずだ。さらにそこにはマルティニックのプレー火山の追憶も無視できまい。麓の首邑サン・ピエールには嘗てゴーギャンも、ラフカディオ・ハーンとと後の小泉八雲と同時期に逗留していた。だが人口3万のこの町は1902年の大噴火によって、灰燼に帰した。焔の試練を経て初めて成立する火山の造形は、人間の創作力の限界へと自覚を促し、天地創造との混融の夢をも逞しくする。

こうしたゴーギャンの地質学的想像力について、著者も依拠するダリオ・ガンボーニは、日本人研究者とも久しく啓発し合ってきた。粗い褐色の焔器の肌と円筒なす曲面上の浮彫りには、日本の茶陶と西洋彫刻との融合があり、著者も克明に記すとおり、そこにはゴーギャンの母方に由来するペルーのナスカやチム陶器の形状記憶も、確かな刻印を残している。

ゴーギャンには《熟帯の植物の形をした花瓶》（1887―8）も知られ、鳥と女神とされる浮彫が表裏に施されているが、その横からは左右に巨大な枝葉が両腕のように伸びる。『ノアノア』の手稿本に挿絵のある《抱擁》では、ペルーの木乃伊から生えたこの生命の樹の叢の上で野生の男女が交合を遂げている。それが死と再生の儀礼＝祝祭であることも疑いない。

本書の豊かな細部に踏み込む余裕は既にないが、著者は例えばロザリンド・クラウスの分析などを批判せずに援用する。だが著者の作品分析は、私見ではクラウス理論の浅薄・強引な読みを裏切り、その限界まで暴露している。ブランクーシに師事したイサム・ノグチから感化を受けた陶藝家の八木一夫は「中は虚ろか」を走泥社の問題意識の起点に据えた。ゴーギャンに結節する日本趣味から未開主義への展開、東西南北の出会いからは、Greco-Romanの美的規矩には還元不可能な、「中空」志向の造形意識の発芽が、如実に感知されてくる。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）